

## 先端の内視鏡技術で安心と信頼の医療を 内視鏡センターのご紹介

当院では、胃や腸、胆道・膵臓、肺、喉頭など幅広い領域に対応する「内視鏡センター」を設置し、正確な診断と高度な治療を提供しています。内視鏡検査は、先端に高性能カメラを備えたスコープを体内に挿入し、臓器を直接観察する検査で、病気の早期発見に欠かせません。検査中に病変の組織を採取して病理診断につなげることや、内視鏡的ポリプ切除・止血といった治療を同時に行えることも大きな特徴です。

当センターは中央棟2階に位置し、7室の検査室に加え、準備室・回復室・診察室を備えています。各検査室はプライバシーに配慮した個室構造で、安心して検査を受けられる環境を整えています。さらに中央カンファレンス室ではすべての検査映像をリアルタイムに共有でき、多職種が協力して安全性の確認と診断の質向上に努めています。

### 質の高い診断と内視鏡技術

正確な診断は質の高い治療につながります。当センターでは最新の画質内視鏡システムと特殊光観察を導入し、静脈麻酔を用いた苦痛の少ない検査を実施しています。日本消化器内視鏡学会や日本呼吸器内視鏡学会の専門医・指導医、内視鏡技師など専門スタッフがチームを組み、診断精度の向上に努めています。

### 早期癌に対する診断と治療

食道・胃・十二指腸・大腸の早期癌に対しては、内科・外科合同のカンファレンスを週1回開催し、多角的に治療適応を検討しています。難度の高い症例には全身



麻酔下での内視鏡治療を積極的に導入しています。機能温存と腫瘍根治の両立を目指し、患者さんの生活の質を守る治療を提供しています。

### 先進的な内視鏡治療

食道アカラシアに対する経口内視鏡的筋層切開術、粘膜下腫瘍に対する経口内視鏡的腫瘍核出術、胃や腸の壁を全層切除する内視鏡的全層切除術、胃食道逆流症に対する内視鏡的胃食道逆流防止術など、国内でも限られた施設でしか行えない高度治療を導入しています。これらの先進的な治療で、低侵襲で安全性・整容性に優れた新しい選択肢を提供しています。



### 炎症性腸疾患への対応

潰瘍性大腸炎やクローン病に対しては、カプセル内視鏡やダブルバルーン小腸内視鏡を活用しています。クローン病による小腸狭窄には内視鏡下バルーン拡張術を積極的に行い、患者さんの症状改善に寄与しています。

### 胆膵内視鏡

胆道・膵臓は体の奥にあるため、従来は診断が難しい領域でした。当センターでは内視鏡の先端にエコー装置のついた超音波内視鏡(EUS)を用いて膵臓・胆管を詳細に観察し、EUS下穿



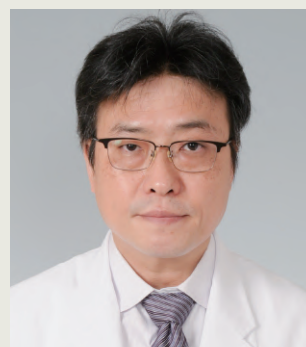
刺吸引法により腫瘍やリンパ節から直接組織を採取しています。また、膵周囲の液体貯留や胆管・膵管の閉塞に対しては、EUSガイド下で低侵襲な治療を行っています。一方、内視鏡的逆行性胆管膵管造影(ERCP)では、専用スコープで造影剤を注入し、胆管や膵管の結石・狭窄を評価します。必要に応じて結石除去やステント留置も可能です。さらにバルーン内視鏡を応用することで、胃切除後など解剖が変化した患者さんにも対応できます。

### 気管支鏡・喉頭内視鏡

呼吸器内科と外科が担当する気管支鏡では、肺癌の診断やレーザー治療、アレルギー性肺疾患や間質性肺炎の評価を実施しています。EBUSによるリンパ節検査やバーチャル気管支鏡、さらには九州初導入のクライオ生検などで精度の高い診断を実現しています。耳鼻咽喉・頭頸部外科による喉頭内視鏡では、声帯ポリプや喉頭癌の診断、咽頭異物の除去を実施しています。

### まとめ

当センターは多職種によるきめ細やかな医療と看護で、患者さんが安心して検査や治療を受けられる環境を整えています。最新の設備と専門性を生かし、地域の皆さまに安全で質の高い医療を提供し続けます。



内視鏡部 診療部長  
医師 平井 郁仁  
ひらい ふみひと

# 福大病院 No.133

## ニュース

Fukuoka University Hospital News

2025  
秋号  
AUTUMN

### 西日本有数の症例数

## 最先端ロボット手術センターのご紹介

福岡大学病院は、2008年に地域がん診療連携拠点病院として認定され、以来、がん医療の中核として最先端の医療を地域に提供してきました。2020年4月には、さらに一歩進んだ医療を実現すべく、「最先端ロボット手術センター」が開設され、安心して高精度な外科治療を支えています。

センターでは、手術支援ロボット「ダビンチ」を中心に、国産ロボットの「hinotori™」「Saroa」も

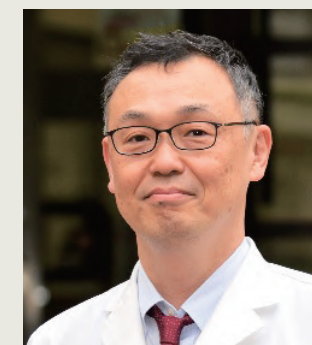
導入。2024年度には年間637件と九州一のロボット手術を実施し、これは西日本でも5番目となる症例数となっています。対象となる診療科は、消化器外科・腎泌尿器外科・呼吸器外科・婦人科と多岐にわたり、各領域での難易度の高いがんにも対応しています。

「ロボット手術」と聞くとSF映画のようなイメージを持たれるかもしれませんが、実際は、外科医

が遠隔操作でロボットアームを動かす、繊細かつ正確な手術を行う技術です。特に狭い部位での手術や視野が限られる部位での操作性に優れており、患者さんの身体への負担が少なく、回復も早いのが特徴です。

また、当センターはロボット手術の教育拠点としても全国的に注目されており、多数のプロクター(指導医)やメンターが在籍。全国から外科医が技術習得のために訪れています。

「ロボット手術って特別な人しか受けられないのでは?」と思われる方も多いかもしれませんが、今では多くの術式が保険適用されており、より身近な選択肢となっています。手術についてお悩みの方は、ぜひ一度、担当医にご相談ください。



最先端ロボット手術センター  
センター長  
医師 佐藤 寿彦  
さとう としひこ

Open! 当院では、  
各種SNSを  
開設しています!

4 福大病院ニュース

公式YouTubeチャンネル  
<https://www.youtube.com/channel/UCYwMO3PwlaDYNNvXTXVUocA>



Facebook  
<https://www.facebook.com/FukuokaUniversityHospital/>



X (旧Twitter)  
<https://x.com/Fukuokaunivhosp>

instagram  
<https://www.instagram.com/fukuokaunivhosp/>



福岡大学病院

〒814-0180 福岡市城南区七隈七丁目 45 番 1 号  
TEL (092) 801-1011 代 URL : <https://www.hop.fukuoka-u.ac.jp/>



## 本館移転部署のご紹介

## 血液浄化療法センターについて

当センターは、血液を一旦体外に循環させ、体に不要な物質を取り除く血液浄化療法を専門に行う部署です。代表的なものは末期腎不全の患者さんに対して行われる血液透析で、その件数は年間のべ5,000件を超えています。当院は大学病院であり、新たに透析を始められる方や、合併症のために手術や特殊な治療を併せて行う必要がある方など、より高度な医療管理を必要とする患者さんが数多く集まっています。

外来診療では、患者さん一人ひとりの病状や生活に合わせ、最適な腎不全治療を提供できるよう心がけています。腹膜透析との併用や在宅での血液透析にも対応しており、腹膜透析の患者数は県内有数です。さらに、在宅血液透析を扱う大学病院としては西日本で唯一であり(2025年9月原稿執筆時点)、患者さんがより自立した生活を送れるようサポートしています。

血液透析に加え、アフエリシス療法も幅広く行っております。アフエリシスは血液中の特定の成分を選択的に除去する治療法で、腎疾患のみならず自己免疫疾患や血液疾患などにも適応があります。近年は下肢血流障害による皮膚潰瘍に対するコレステロール吸着療法の需要が増えており、循環器内科や形成外科と連携しながら年間100件を超える治療を実施してい



血液浄化療法センタースタッフ

ます。そして、当センターでは、血液透析、アフエリシス療法、どちらも教育施設として認定されており、医師のみでなく、看護師や臨床工学技士の研修も多く引き受けています。

どの治療においても、血液を体外に循環させるという特徴から血圧が低下しやすく、病状が重く不安定な患者さんが多いため、状態を細かく監視することが重要です。また、取り扱う患者さんはほぼ全ての診療科にわたっており、それぞれの病態に合わせて機器を使い分ける必要もあります。看護師や臨床工学技士と職種間で協力し、それぞれの専門性を生かして治療にあたっています。さらに、週1回のカンファレンスを通じて診療部署間でも積極的に連携し

て、安全で確実な医療を提供できる体制を整えています。

このように、当センターは「高度な専門医療の実践」「教育拠点としての責務」「安心できるチーム医療」の3本柱で、患者さんとご家族に信頼いただける血液浄化療法を提供しています。

血液浄化療法センター  
診療部長

医師 伊藤 建二

いとう けんじ

## 本館移転部署のご紹介

## 総合周産期母子医療センターのご紹介と就任のご挨拶

2025年4月1日に福岡大学病院総合周産期母子医療センター教授を拝命いたしました井上貴仁と申します。

福岡大学病院総合周産期母子医療センターは1998年、国および県より、周産期医療の中核施設である総合周産期母子医療センターとして、福岡県で初めての指定を受け、福岡県の周産期医療対策事業の中心的医療施設として機能しており、20年以上の長きにわたり、福岡県の周産期医療を支えてきました。

当センターは、周産期医療を1つの診療単位と考え母体・胎児・新生児に対する高度な医療を提供しています。産科部門はMFICU(母体・胎児集中治療病床)9床、後方病床16床を有し、新生児部門ではNICU(新生児集中治療病床)24床、後方病床12床で運営され、西日本でも有数の病床数を有する総合周産期母子医療センターとして診療しています。

## 産科部門

産科部門は、切迫流早産、妊娠

高血圧症候群、妊娠糖尿病、多胎妊娠、胎児疾患、合併症妊娠(精神疾患や内科疾患など)などを対象として、高度な医療を提供しています。特に、手術室や救命センターとの連携によって常位胎盤早期剥離や産科危機的出血への迅速な対応を可能とし、無痛分娩や院内助産を推進し、安全かつ安心できる診療を心がけています。

## 新生児部門

新生児部門では早産児、低出生体重児や重症新生児仮死の胎外での発育管理・集中治療や新生児の内科的疾患に加え、小児外科をはじめ、外科系の各診療科の協力のもと外科疾患の周術期管理も行っています。また、NICU(新生児集中治療室)を退院後も児の成長と発達を継続して見守る発達外来を行っています。各種専門医とも連携して長期的に注意深くフォローアップし育児を応援しつつ、発達支援、年代に応じて発達を確認する検査も定期的に行っています。

## 拡大新生児スクリーニング

少子化が止まらない現状から、母と子の健康を守る母子保健の重要性は格段に増してきています。治療可能な疾患に対する早期診断のための、私のライフワークでもある拡大新生児スクリーニングを福岡県で2007年から全国に先駆けてその体制構築から実施に関わってきました。福岡県では33万人以上の新生児がこの拡大新生児スクリーニングを受検し、発症前に治療し良好な結果を得ています。今後も対象疾患を拡大し、早期発見、早期の医療介入、発症予防を目標に取り組んでいく所存です。

私のこれまでの経験を生かし、新生児スクリーニングの発展、先天異常を含めた遺伝性疾患に対する遺伝医療への取り組み、NICUを退院した児のフォローアップ体制の構築など、地域産科の先生方とも密な連携を図り、今後の福岡地域の周産期医療の発展に尽力してまいります。今後ともよろしくお願いいたします。

赤ちゃん和家人の  
“やさしい空間”づくりプロジェクト

NICUの壁面装飾やパーテーションを設置し、「あかちゃんと家族の“やさしい空間”づくり」を行いたいと考えています。

クラウド  
ファンディング  
実施中です  
10月31日まで

総合周産期母子医療センター  
センター長・教授

医師 井上 貴仁

いのうえ たかひと